

昭和47年11月15日発行・第36号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

リベルテール

11月号



Libertaire VoL, III, No12

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年九月
昭和四十七年十一月十五日発行第三十六号

定価一〇〇円(送料共)

目次

戦後の思い出	6	杉藤二郎	1
芸術とアナリズム	三浦精一	6	
スタイルネルの概観	大平智円	11	
無残な女の青春	ハギシン	16	
野火		17	

畳の表替とG H Q (General Headquarters)

戦後の思い出 161

杉藤 二郎

この年は、全通の山猫争議（G H Q命名）を始め、官公労、東宝争議と大きな組織のストが相次ぎ、賃金のベースアップ、労働条件の改善、などを闘い取っていた。麻生鉱業も畳の表替えに絡んで、ストの態勢を敷こうとして、連合組合の総会を開いた。総会と言っても、各山の三役と各山から二十人の代表が選出されて開くもので、総数二百人程、この総会は特異なことに、来賓者は一人も居ないが、占領軍総司令部（G H Q）から派遣された、労働担当官バーロー大尉が、副官と通訳官（二世）を従え、議長席の横に鎮座しましたことだ。後で解ったことだが、今日の総会で、ストライキ決行の決議がなされる事を恐れ、会社がG H Qに連絡したのだそうなの。

代議員の発言は、何処の山も申ししたように、ストライキ決行を強調した。その中で、独り吉隈坑の代議員だけが『ストライキ決行に反対した。』当然、反対理由の説明を求められた。その役割は私がすることになり、次のように私は説明した。

『労働者がストライキを以て闘おうとするには、そ

れだけの理由がなければならないし、労働者組織の大部分の意志が結集されねばならない。只今までの畳表替に關する、会社側と連合幹部間の接渉結果報告では、両者間は只感情に走り、言葉の失言が深い根因となっているように窺える。私は職員組合を交え、会社、労組の三者協議会を開き、今一度討議を重ねる必要があると思う。その結果に於ては重大決定となることも止むを得ない。これは吉隈坑の代議員会並に総会での決定事項であることを附け加える。』

麻生連合の幹部達は、思いがけない吉隈坑の発言で動揺し、議長が十分間の休憩を宣した。その間に、各山の代表者が別室に集り、協議を重ねたが容易にまとまらず、十分の休憩が三十分になり、結局、吉隈坑の意見を取上げ、この問題は再度三者協議会を持って検討することによって解散した。

ところが、その翌々日、スト強行派と見なされた本間連合会長（芳雄製工所出身）及び中野外一名（赤坂坑）の三人に、G H Qから出頭命令が届いた。吉隈坑の私の

処へは、警察電話で連絡があり、やはり同日に、私もGHQへ呼出された。四人は本社へ集り、占領軍払下げのジープで、博多の司令部へ出頭した。五分程待たされた後、バーロー大尉の室に私以外の三人が呼び込まれ、三十分位で私と入替った。私には一あの時、吉隈が反対した理由を再度聞いたり、各山の労働者数を聞いたりしたが、私は各山の人員は、正確に知らないと言えたら、バーロー大尉は、どう受取ったのか、「そんなことでコー・ルマインの組合長が勤まるか。」と、えらい見幕である。私はそれをねとばすように、一私は吉隈坑の組合長であり、他の山の従業員については、正確な数字は知らないと言えたら、答えようがない。凡その数字は知っていても、自分の山でさえ毎日異動している。それなのに、麻生一門だからと云って他の山のことを正確に知る筈がないではないか。」と反論した。これが昔の日本だったら大変な事になって居ただろう。「上官に口答えするか」と頰がゆがむ程ビシタをくったにちがいない。さすが民主主義のアメリカさんだ。オーケーで事をきを得た。バーロー大尉と対談中に、大尉が煙草を吸うかと聞くので、イエスと答えると、二、三本減っている箱を私の前へ放り出し吸えという。私は、封を切っていない物なら頂くが、一本や二本なら吸うことを辞退すると、出された煙草に

手をつけず、それより用件が済んだら早く帰り度い旨をつげた。バーロー大尉は下士官を呼び何事かを命じ、私を控室に案内した。そこには同行の三人も居た。間もなくジープが来て、私達は乗り込んだがその時、バーロー大尉から私にと言って、二十センチ角の箱が渡された。家に帰って箱を開いたら、新しい煙草が入っていた。帰路、車の中で四人が語り合った処によると、私以外の者は、司令官から、ずいぶん手痛く叱責されたらしく、沖繩へ連れて行くぞとおどされ、訳もわからずひたすら頭を下げるのみだったらしい。GHQといえども理論に二つはなかった。ただ一方的に資本家の味方だけではなかった。私はバーロー大尉にも、その上官のアイケル・バーカー中將にも、資本家の不当な行為を正す為には、最後の手段としては、ストライキの決行も致し方ない事を、充分説明しておいた。また、GHQも簡単にスト破りの指令を出さないよう要望もした。これらの事は、二世の通訳を差し挟んでの会話であり、最初の中は、険悪な空気の中で行われた為に、互に語気も鋭く渡り合ったが、私はGHQから呼出しがかゝった時から、「GHQの労働組合への干渉を除去すべし」の心構えで出頭したので、順序立て、話す中に、次第に互の感情もほぐれ、笑顔で会話を打切ることができた。それ以来バーロー大

尉と親しくなり、大尉は吉隈炭坑はちょいちょい遊びに来るようになった。後にして思えば、或は私を監視する意味も含まれていたかも知れない。何年であったか記憶も薄れ遂に思い出せないが、彼が本国へ転動になる前のこと、吉隈坑へジープで来て、私の家へ立寄った。その時、手土産に、直径十五センチ程の菓子缶とビールの缶詰を貰った。彼持参のビールを飲みながら語り合ったが、占領軍の将校が、たとえ組合長であったとしても、炭坑の一労働者と酒を飲み交すなどということは、聞いたことのないし、何の為に私の処に出入するのか、一寸気持ちの上に引っ掛るものがあった。帰り際にニュースペーパーを呉れと言われ、それが平民新聞のことで八二号と指定されて、驚くと同時に、納得がいった。八二号には、私が共産党吉隈細胞に抗議する一文を書いている。それをほしがらるからには、やはり占領軍は思想問題にも注意を払っているのだと私は思い当った。何処でどう知ったのか、私が平民新聞を散布していることも、アナキストであることも、彼バーローは既に知っていたのである。バーロー大尉が帰国した後、私も病気の為、炭坑を退山することになるが、占領軍に代って、今度は法務局や警察署の警備課から、月に一、二回訪問を受けるようになった。

福祉新聞会無政府農園

戦後のインフレ景気は、労働者の賃金ベースアップ運動となり、全国有らゆる産業の労働者は、ストライキを含む闘争に明け暮れた。吉隈炭坑も常時緊張状態で、資本家側と接渉を持ち、賃金ベースアップ、福祉厚生施設の改善を聞いて行っていたが、残念ながらベースアップより物価の上昇の方が先行することは現在と同じである。しかし、私の組合長時代は、幸か不幸かストライキをさけることができた。

当時、物価の上昇に見合って、平民新聞の取価も左の通り変動した。

年	月	日	取価(円)	取価(円)
1946年	6月	15日	(創刊号) @ 0.30	0.05
	47	2 24	17号より第三種郵便物許可	(週刊)
	"	5 21	27号	" 0.50
	"	7 16	33号	" 1.00
	"	10 17	45号	" 1.50
	48	7 12	80号	" 2.50
	49	3 14	111号	" 5.00
	"	7 18	126号	" 5.00
	1950	6 10	(岡山9号) 高知	" 10.00
	"	11	143号	" 10.00
	"	11	(広島で2回発行廃刊)	0.80

近藤憲二さんが新聞編集を辞めてから、岡山の高畑、広島の実原と次第に西部へ、平民新聞の編集発行も移って行が、ごと新聞に関する限り、副島辰己、井原末九郎、小副川善吾の三人を中心とした九州地協の活躍は、戦後に於けるアナキスト連盟運動の記録に特記すべき事であろう。前にもちょっと触れたように、私がアナ連の存在を知ったのも、副島が売っていた平民新聞からであり、確か三六号、三七号の合併号だったと思う。それは一九四七年夏も終りに近い頃だ。それ以来、私は九州地協の一員として活動に参加した。福佐新聞会は、井原末九郎を中心に、共同体を構成していた。副島の構想では、新聞売上金の中、一円を連盟に納め、五拾銭を積立てる。(当時平民新聞は一部一円五〇銭)その積立金で運動資金、扶助金、共同事業資金に充当するつもりであった。四十四号(一万二千部)から五十五号まで十二回分を試しに積立てたが、取扱部数の増減もあり、収入六万三千四百円となった。然し会員申合せによる、行動日の食費、会場費、扶助費などの支出が多く、赤字二千二百円を出した。(一九四八年一月の副島発表による。)こおした赤字を、小副川の博多人形製作による利益金や、井原末九郎の私財投入、副島の献身的努力等三者一体となって補って行ったが、それにも限度があり、遂に新聞会を解

散するに至った。平民新聞の最大発行時は三万五千部に及び、その大部分の販売は福佐新聞会が受持った。紙の配給を十万部まで高めて政府へ陳情するのだと、副島がいきり立った時代もあった。何しろ福佐新聞会の連中は、無政府主義を掲げて、東北地方まで足を延ばした時であり、新聞売りや街頭宣伝のベテラン揃で、官憲や鉄道公安員とのトラブルも起きた。その最も激しかった代表は、小山一弥である。いつものように彼は佐賀から長崎へかけて、列車内で新聞を売ったが、たまたま闇米移動取締官と逢い、小山は『かつぎ屋』(闇米を運搬して糊口をしのいで居る女達)の持っている米を、取締官達に没収されるのを防いでやるため、進行中の列車の窓から、米袋を外へ放り出したり、公安官の行手を遮ぎったりして、十数人の『かつぎ屋』を、全部逃してやった。あの大きな体格の小山が、暴れ廻る様を睨にうかべるとき、如何に公安官が手こずったか想像がつく。さて、公安官らも手がつけれず、途中の駅で警察官の乗車を求め、小山を公務執行妨害罪で起訴した。小山が長崎検察庁送りとなった頃には、新聞の売行も悪くなり、博多人形もまだ軌道に乗らず、副島も四苦八苦の時代で、小山の保釈金も算段出来ず仕舞で、私とその事情を小山に伝えるべく、長崎地方裁判所へ出かねばならない次第であった。悪

い事は重なるというのか、久留米の鞍打辰雄が、トラックの積荷のくずれで怪我をしたのもこの前後である。そちらの賠償の交渉には、貝島大之浦炭坑に居た、居初喜蔵が当った。この頃、九州地協はしばしば会合を持ち、討議を重ねたが、どうにもならず、遂に福佐新聞会を解散することになり、井原末九郎が自分の所有である太良町の山林・田畑約二町歩を、無政府農園として投出し、新聞会で働いた若者の精神的よりどころの一環としたのである。井原に言わしむれば「無政府農園の件は、アナキスト好みで過大評価され、平民新聞売りはアナキスト好みでなかったとみえて甚だ過少評価されているようだ。実は、無政府農園は平民新聞売りの残務整理のひとつであった。副島の家族ぐるみ上京(一九四九年一月)は、東京での平民新聞発行の大詰をになった。一九四六年(昭和二十一年)秋より一九四八年夏まで、二万―三万五千の発行部数の大部分は、福佐新聞会によって頒布され、紙代の殆ど全部は売上金の有無にかかわらず、新聞会の責任において納金した。新聞を売ることによって、無政府主義運動に参加して重要な役割を果たした、という誇りの持込場として絶好の場面と考え、無政府農園という一つのクッションを置き、気分的に若い人達を緩和したと思う。新聞売り組織の運営は二年間ぐらいですが、確かに大

仕事でした。無政府農園は、その中の氷山の一角より尚低い存在でしたが、それを高く評価して、新聞売の評価が出来なかったアナキスト達に愛想が付きましました。」この農園共同体も一九四九年五月に解体し、その中の藤川、御幡、末次の三人が吉隈坑へ入山した。三人は私と共に吉隈坑で活動が続けていたが、私の指導も行届かなかったのか、常に職員や寮生と意見を異にし、結局三人は、三十日足らずで一人ずつ退山してしまつた。炭坑の仕事は個人プレーではなく、二十人なり三十人なりの共同作業である為、彼等が新聞売りや無政府農園での体験とは異り、或る程度の妥協と言うか協調と言うか、作業上の忍耐を持つ事は必要であった。しかし、三人は余りにも若く、無鉄砲すぎ、御幡は二十日、末次は二十二日と相次いで退山してしまつた。残った藤川も彼等二人と同一視されて落付かず、三十数日で郷里へ帰った。私としては副島からの依頼も有り、今後の活動を続ける上に、仲間として大いに期待していたのに残念であった。彼等の退山後、GHQ指示による、レットページが強行される。私は組合長を二期でやめ、労務課へ戻ったが、病勢が悪化し療養勝となった。偶々、労務課管轄の保育所運営にタッチしたことから、保母の資質向上と待遇改善のた

め、保育所連盟の結成を図り、初代保育所連盟会長になる。その後、或る事情で妻節子と協議離婚し、炭坑を退

山する。

次は第二部 公害問題等

つづく

芸術とアナリズム

三 浦 精 一

芸術論など、僕はそんな柄ではない。ただそれについてしゃべる機会があったから、まとめて見たに過ぎない。多くの人は、芸術とは何か、などといったことは考えないで、ただ好きだから、面白そうだったから、親や先輩から仕込まれたから、友人から誘われたから、などということ、いつの間にか夢中になってしまったりまたそれ以外では生きられなくなってしまったというのが多い。普通に言われる芸術は、建築、彫刻、絵画、工芸、音楽、歌謡、舞踊、演劇、映画、文学、さらに日本的な茶、生花、造園にいたるまで、時間と空間をふまえて、人間が意欲的に創作し、構成し、表現するものであり、学問や宗教とともに、人間の文化を形成する大きな部門である。

刀剣のような実用的な人殺し道具でも、刀鍛冶が精魂こめて作り上げたものが名刀と呼ばれ芸術的作品とされる。

て、附属品のつばやさやなどの装飾に工匠の芸術作品が使用される。このように実用品が、作者の製作態度や技術、それに加えられる創意によって芸術作品になることは陶磁器や漆器、そして家具などにも見られる。また商業美術に進出する芸術家もいる。このようにして芸術といわれるものと実用品との区別には、はっきりしない面もあるが、芸術と言えれば一般に実用を超えたものの、また時代や国境も超えたものとしての評価もされる。

実用との結びつきばかりでなく、古い時代から呪術、宗教、娯楽、装飾などと大きく結びついていることは皆の知る通りである。また異性に対しての愛情や相聞にも深く関連している。そしてそれが直接の感情表現である場合もあり、シラノ・ド・ベルジュラックのように代理による場合もある。ローレライ伝説のように聞き入る舟人を破滅させることもあれば、天の岩戸伝説のように神

を動かすこともあり、労働にリズムをつける場合もある。

いずれにせよ、そうした天分にめぐまれた人々があり、まったく才能を持たない多数の人びとがあつて、専門化ということとはまぬがれない。こうした先天的な分化は、人生のあらゆる他の面にも見られることで、そのような天分は人間の才能の分布の濃淡とも言うべきもので、決して上下の階層によって考えるべきものではない。しかし、昔から力の勝れた者、知能にめぐまれた者たちが、それを利用して他の人びとを欺いたり、支配したりして階層的な階級観念を植えた。近代においては金銭や財産の所有による支配権が確立されるに至った。長い間のこうした習慣のために、人びとは才能や技能についても上下に階層差をつけて考え勝ちで、才能にめぐまれた者がエリート意識を持ちやすい。

平等に生きる機会を与えられたはずの人間である。群居動物としての人間集団の中で各人の才能の差は、集団全体が生きていくための分業的な相互性と相補性の原理とはなるが、人による人の支配の理由にはならない。

芸術という大きな分野の中で、それぞれの部門における芸術家の数はいたって少ない。多数者である一般人の中でも芸術的天分に恵まれた人たちもいる。したがって一般人の芸術に対する鑑賞や理解の程度も様々で、銭湯

のベンキ絵に感心する人もあり、ゴッホに魅せられる人もいる。この多数を構成するのが政治家、実業家、ジャーナリスト、技術家、官吏、会社員、労働者、農民、商人、その他である。

無理解な世人やジャーナリストたちに葬られた芸術家も多い。竹久夢二は少年少女雑誌に口絵や小曲を書いてその独特の画や、やさしい詩で、その頃の私たちを魅了していた、そのために挿絵画家というレッテルをはられて、彼が精魂こめて世に問うた作品も、「あの夢二か」と軽くあしらわれることになった。ついに身を破った彼は悲惨な死をとげるにいたった。

瀬戸内海に沈んだ詩人人生田春月も、小曲詩人と呼ばれることを苦にしていた。無理解な大衆に真実の評価を期待すること自体が無理と言わねばならないだろう。美を追及する芸術にしても、真理を究める学問にしても、そこには大衆の理解以上のものが含まれている。水が低きに流れるように、大衆に好まれるものは多くの場合、笑いをくすぐったり、安価な涙を誘うものだろう。そうした中で高い目標を目ざすとすれば、たった一人の者にでも分ってもらえたらと覚悟をきめねばならない。大衆は予言者を殺して、後にその墓をかざり立てることが好きである。死後数十年にして竹久夢二が見直されるように

なった。

資本主義の社会では芸術作品も商品である。芸術的価値よりも、大衆性や稀少性が問われることが多い。戦前のプロレタリア文学がソヴィエト権力の指令に追随した結果は皆の知る通りだ。現在でも反体制の文学として追放されている者もいる。芸術は金銭、武力、権力を超えた独立性を持つものである。

労働は商品として生産原価の構成要素になっているがしかし芸術家の制作のための苦悶も、労力も、時間も、資本主義的生産過程とは異質のものである。複製品の製作だったら資本主義的生産の工程になるとしても、芸術的創作や創作のための精進は、こうした商品生産とは全然別物である。有名になったり、マスコミの波に乗った者だけは作品の商品化が容易になるが、他の者たちは正当な評価さえも望まれないで生活に苦しむ。

X

学問は真理を探究し、芸術は美を追及する。学問に自由が要求されるように、芸術の世界にも自由は不可欠である。宗教や哲学が人間性の深みに分け入って、人間そのものの在り方を探るのに対して、芸術は人間とその人間が生きている世界に見出される美を、そのあるがままに、あるいは感ずるままに、あるいは抽象し、あるいは

が、それを葬り去った大衆によって、伝説的光背をつけられたり、稀少価値として金銭的に評価されたりして守り伝えられた。

芸術作品は、学問的著述もそうだが、集団の中で、集団の共同作業としてつくられることもあるが、多くの場合一人の個人によって、その個人の特別な天分によって個性的に表現される。表現の自由は不可欠である。

演劇などは代表的な共同作業で舞台の上での、いろいろな約束の上に立っている。そして脚本読み、試演と公演前にいろいろの作業がある。舞台に立てば前に観客、背後に楽屋の注視する中で、脚本の筋にそった演技が行なわれる。この演技によって観客を舞台と一つに溶けこませ凝集することを目指した芸の世界である。名演技というのは、この定まった運びの中で、脚本作者の意図、そしてそれをいかに解し、いかに演技するか、俳優個人の創意であり創作であり、時には型破りと言われることもある。しかしこれも座員の演技の凝集の上に立つものである。チグハグなものが感じられたら失敗である。

絵画のように個人がキャンバスの上に、客観から切取った部分、あるいは主観を表現するもの、作曲のように楽器を通じて、ある時間の中にそして楽譜によって、画家が限られた平面に固定するものを、ある程度躍動的に

デフォルメして表現する。この表現は自己の表現であり他の拘束を排する自由の表現である。この地上に投げ出された一人の個が、偶然に恵まれた、あるいは苦しい修練を経て得た才能によって表現する作品は、この地上におけるただ一度の出現といった個が持つ唯一の自由によって表現されるものである。

こうした作品を把握するという行為は、現実化された作品の意味するものに迫って行く、その魂の中に入り込んで行く他者の創作でもある。意味するもの、意味されるものといった関係を越えた理解、別様に表現すれば、作品を生きたをすということによって、真実の意味での批評となるのである。

個としての、それぞれの自意識を持つてはいても、その個の中には祖先からの複雑な遺産を受け継いで、環境に反応しながら生きていく複合的な存在で、群居動物というどうにもならない宿命を持つ個である。社会集団は社会的な風俗、習慣、規制をつくり上げて、それを世代から世代に伝えて集団としての生命を維持する。学問も芸術もこの集団が、その財産として、その文化として、守り伝えるものである。一つの作品、それが埋れていたものであっても、誰かによって芸術性が見出された作品

表現するもの、あるいは演奏のように、ステージで指揮者が作曲家が表現を意図したと感ぜられるものを多数の他の者たちと共同で表現するものもある。

表現するということは、他の人々の理解や共感に訴えることで、人間が群居動物として社会的生活をいとなむという宿命につながる。一人だけだったら表現の必要もない。ステルナーの個人主義も他の理解と共感を前提としたものであることは言うまでもない。経済は人間の生の営みとして重要な面であって、影響力は強いとしても、人間の生命はつねにそれを超えて自由を求めるものである。ここに芸術があり、哲学があり、宗教がある。経済力や権力支配に反逆するアナリスットの自由がここにある。

芸術の歴史にも他の学問や宗教とともに消長がある。海外からの強い刺激に呼応して、充実した強い生命力を開花させた日本の白鳳、安土桃山、明治の文化がある。歴史の脉搏を魂に感じて、芸術家の創造的な心は躍動し彼は書き、描き、うたい、おどり、新しい時代に踏みこむ。

X

かつてシナにいたとき、青島のカテドラムのドームに描かれたキリストの像を見たことがあった。案内したボ

イランド人の神父は、このキリストの顔はシナ人だと言った。私は驚いた。西洋風に描かれたその顔がシナ人臭いとはどうしても思えなかったからだ。東洋と西洋の差がここにある。ここに民族がある。洋服を着こなしていても日本人は日本人を表現し、芸術家はその個性を通したものの、民族を表現するものである。

東の間の生命しか持たない人間が永遠の美に生きようとするに至るまでには、幼年期や少年期、そして修煉期を過ごさねばならない。天才や天分に恵まれた人たちはその開花期が早いというだけで、そうでない人たちは五十才、六十才あるいは七十才になっても苦しい修練を重ねる者もある。笑われても、軽蔑されても、一度垣間見た美に捕えられて生涯を終るのだ。見果てぬ夢を失望して生命を縮める人もある。一つの社会集団の中で、皆と一緒に生きればこそ、こうした自由が考えられねばならないのだ。天才であっても、一つのひらめきを作品に構成するとすれば血の出るような精進も必要である。芸術を愛し、それに捕えられ、それ以外では生きられない者にとっては、こうした苦痛も当然のことと考えられる。芸術家の喜びと自由はここにある。常人が考えるようなユートピアや極楽や天国の喜びや自由ではない。芸術家は天国でも苦しまねばならないだろう。そこに自由があ

る。資本主義社会や権力社会では、この自由すら阻止される。前にも言ったように芸術的精進は労働と認められてはいないからだ。マスコミの支配する社会では大家と呼ばれる人たちだけが、描き捨ての紙まで金銭的評価の対象とされる。芸術家は権力や金力に媚を売って、娼婦的自由を得ようとするものではないはずだ。

X

かつての平民新聞には小川芋銭や平福百穂、竹久夢二なども筆を揮ったと聞いている。幸徳や大杉も、その他多くの同志たちが血を流して開拓した日本のアナルズムも、一時マルクス主義に押されて影をひそめたが、権力や金力の下に真の自由のないことを知った若い人たちの中に、ふたたび燃え上りつつある。

人類とともに古いこの思想は、老子や仏教やキリスト教の中にも辿ることができる。これは人間回復の思想である。そのために人間の在り方を問う思想である。学問や宗教は人間そのものを問おうとする。芸術は人間とその生命の展開させる世界を表現しようとする。

人間回復のために、その在り方を問うアナリストの怒りは革命の炎となって燃える。権力や経済的改善で人間をつくり変えようとする思想とはちがう。それは焼きつくす火の思想である。